

C-3 色彩嗜好における変動過程の分析 (第2報)

東京家政学院短大 今井 弥生

1. 若年層における色彩嗜好は、将来どのようになるか、ということについて、第1報において、一定の色彩圏内における嗜好の移動に対してマルコフ過程を適用したが、嗜好の移動要因となる心理的条件についてはふれなかった。

今回は成分分析の結果からえた情報に基づいて、心理的な接近を試みた。

2. 調査の方法は短大家政科女子学生(18~21歳)150名を対象に、日本色彩研究所作成の150色を用い、質問紙法によりパネル調査をおこなった。内容はこれから購入しようとする服の色彩を一色だけ選ぶ。色彩の観察はJISZ 8723に従った。時期は'66年10月と翌年10月である。

3. 色彩嗜好推移確率行列から年次変化をみると、主対角線上にあるイエロー、ピンク圏の定着率が高い。次に成分分析によりA, B, C, D別に分類すると、対角線上の値の大小によりロイヤルティがA, B, C, Dの順に弱くなる。さらに各グループの関連度については、AとBとが最も高い。そしてDはAに移行する傾向が強いことを知った。